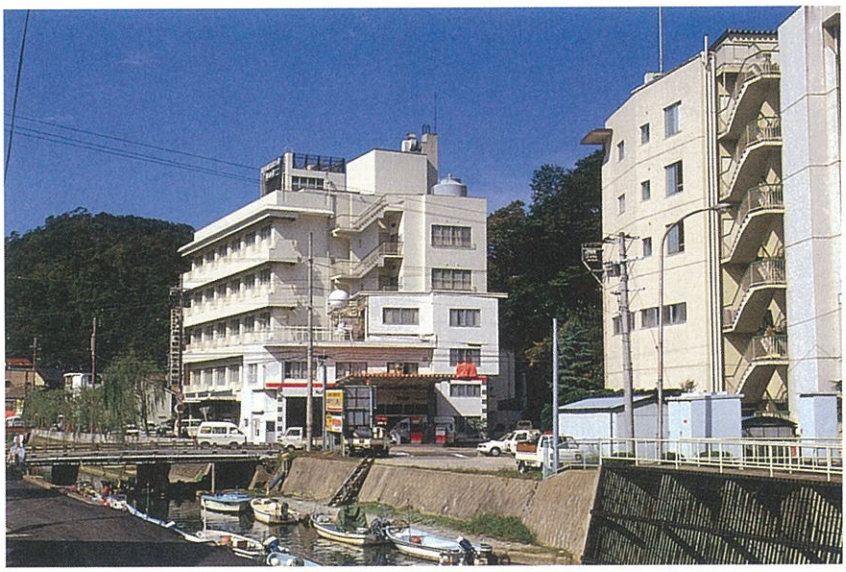
7

色彩をいかした まちづくり事例

ここで紹介する全国の地域・地区では、色彩をいかした景観づくりを積極的に進めています。歴史的まちなみの保全・活用からニュータウンの開発に至るまで、さまざまな誘導手法やデザインが試みられています。
よりきめの細かい色彩景観づくりをすすめていくための手がかりとして、こうした先行事例を参考にするのもよいでしょう。

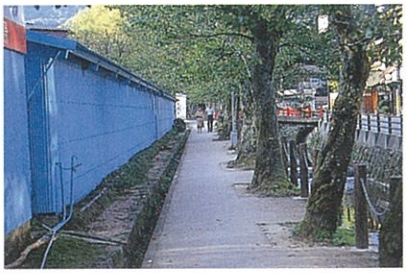
城崎温泉地区 —兵庫県豊岡市城崎町

地域に蓄積された色彩をいかした「和」の温泉街づくり



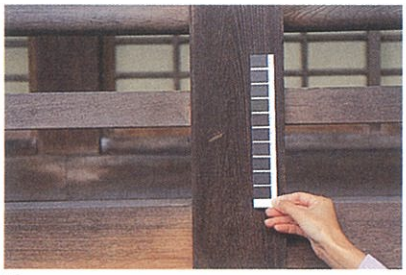
1

2

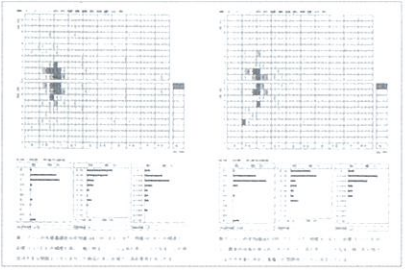


3

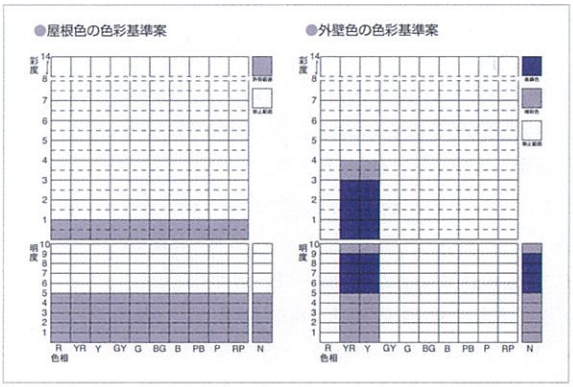
4



5



6



7

8

9

10

●1―城崎温泉地区は、開湯以来1,400年の歴史をもつ古い温泉街です。しかし、旅館の近代化、大規模化に伴って、周辺の景観と対比的な色彩や形態の建物も見られるようになっていました。

●2･3―また、屋根の色彩にもばらつきが見られるようになり、川沿いの穏やかな色彩環境にはそぐわない原色を使った建物も見られる状況でした。

●4―町では、色彩に配慮して街路灯などを整備しましたが、採用されていた色彩は彩度が高く、周辺の景観から突出していました。

●5･6―兵庫県による「景観形成地区」指定に向けて、専門家を起用した客観的な色彩調査が行われ、現況の色彩の様子やその問題点が明らかになりました。

●7―古い旅館や周辺の自然環境など、地域の景観に大きく寄与している色彩要素が抽出され、それを参考にした色彩の許容範囲や禁止範囲が提案されました。

●8―関係者への説明会や意見調整を経て、色彩ガイドラインが設けられ、形態や素材に関するガイドラインとあわせて、パンフレットのかたちで関係者に配布されました。

●9･10―各部位ごとに設けられた色彩、形態、素材のガイドラインに沿って修景が図られ、永い歴史をもつ温泉街のたたずまいが一層洗練されたものに生まれ変わりつつあります。

新百合ヶ丘駅周辺地区 ―神奈川県川崎市

「ふるさと」の落ちつきをもつ、緑豊かな駅前景観づくり

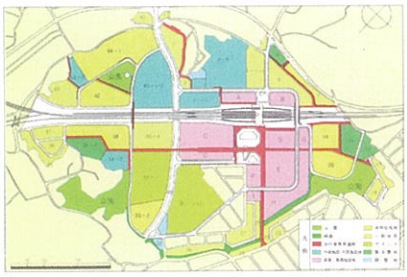
●1―新百合が丘駅前周辺地区は、川崎市の新都心として区画整理事業が行われた新しい街です。

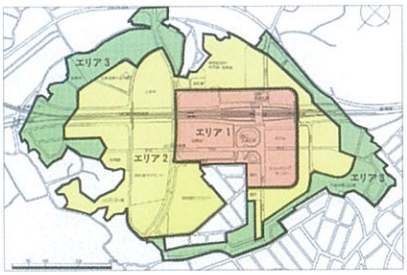
●2・3―地権者や周辺住民、行政、商業者などによって構成される「まちづくり推進協議会」によって、土地の利用形態に応じたゾーニングが検討され、明るく個性的な色彩で構成される駅前から、落ちついた中明度の色彩で構成される住宅街まで、ゾーンごとの基調色が決められました。

●4・5―ゾーンごとの基調色に沿って、建築物やペデストリアンデッキなどの色彩設計が行われ、「ふるさと」の風景を意識した植栽の緑が映える穏やかな色彩景観が形成されています。

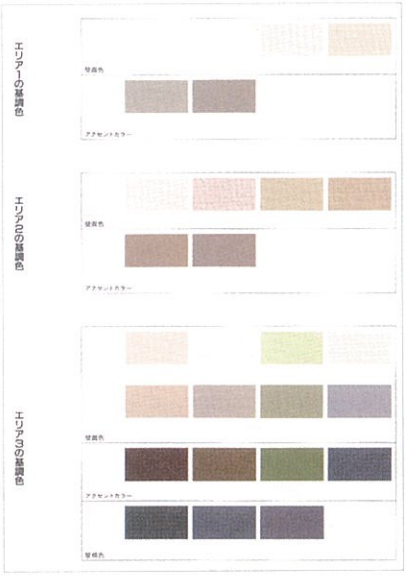
●6～8―また、ストリートファニチュアや公共サインなどは、樹木の色彩と融和するよう、樹木の色彩に近い、Y(黄)系やGY(黄緑)系の低・中彩度色で統一されています。

●9～12―さらに、広告物ついても、規模や掲出方法、色彩のガイドラインが設けられ、景観阻害の原因になりやすい高層部の広告物は、無彩色や金属などの素材色を基本にした、落ちついた色彩が採用され、駅前にありがちな煩雑なイメージの広告物は排除されています。


1



2



3

4

5

6

7

8

9

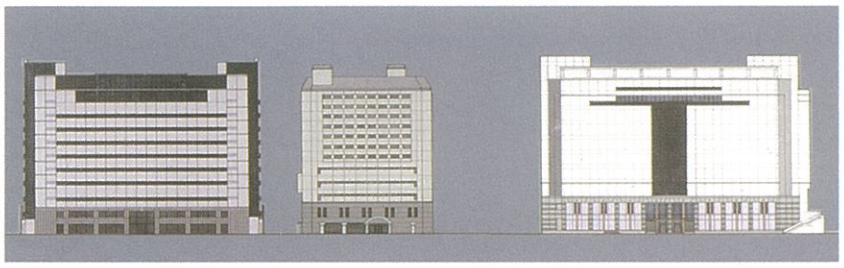
10

11

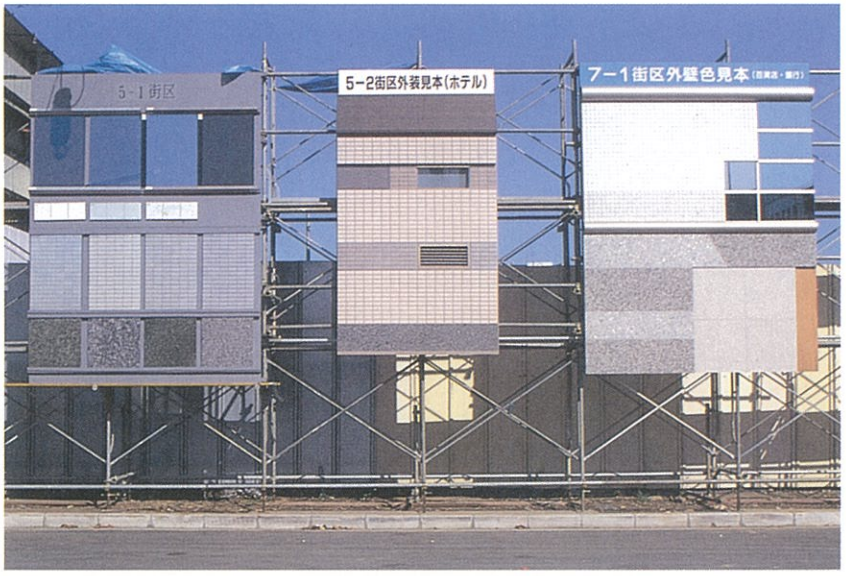
12

1

2



3



4

ファーレ立川地区 —東京都立川市

遠景・中景・近景の色彩の見え方に配慮した色彩景観づくり

●1・2—東京多摩地域の中核として位置づけられる立川市の中心部は、建ち並ぶ建築物や広告物が派手な色彩を競う、典型的な繁華街になっています。

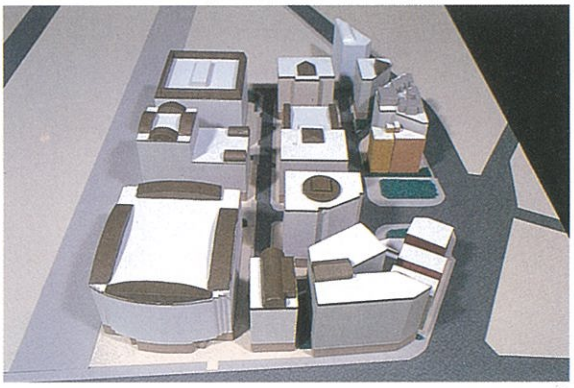
●3・5—ファーレ立川地区は、こうした繁華街に隣接して計画された、店舗・事務所・集合住宅の複合体ですが、早期の段階から都市デザインの重要な要素として色彩が位置づけられ、周辺のまちなみとは一線を画した誘導が図られています。

●4—特に、施工段階においては、各施設の設計者が大型の見本パネルを作成し、精度の高い色彩調整が行われました。

●6—人目に付きやすい基壇部は、素材の質感をいかした重厚な色彩によって、遠くからよく見える高層部は、軽快な色彩によって構成されています。

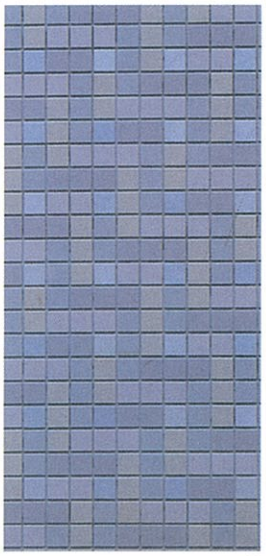
●7—また、壁面に近づいたときにも単調なイメージを与えないよう、タイルパターンなどにも工夫がなされています。

●8—照明やパブリックアート(屋外彫刻)などには、派手な色彩が許容され、まちなみに華やかな彩りを添えています。



5

6



7

8